

1. 事務局移転のお知らせ

当学会の事務局は、2006年3月末までの3年間慶應義塾大学に置かれていましたが、4月より移転することになりました。新しい事務局は今後3年間福岡大学に置かれます。事務は福岡大学と西南学院大学の協力により行なわれます。

〒814-0180 福岡市城南区七隈 8-19-1

福岡大学 人文学部内

日本フランス語学会

sjlfアットfukuoka-u.ac.jp

2. 旧事務局から

2003年4月から3年間、事務局は慶應義塾大学の川口、前島、喜田が担当しました。多くの方々に支えられ、無事に業務をこなすことができました。特に前事務局の大阪大学の方々、とりわけ三藤博さんには主に会計関係の煩瑣な問題について何度も懇切丁寧なご指導をいただきました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

この3年間、不備や遅れによってご迷惑をおかけすることもあったかもしれません。事務局の業務は専任の職員ではなく、担当する大学の教員が公務の合間を利用して行います。学会員の皆様には、このような事情をご理解の上、ご容赦くださいますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、2006年4月より新事務局をご担当いただく福岡大学と西南学院大学の方々には、よろしく願いいたします。(喜田浩平)

3. 編集委員の交代

編集委員のうち川口順二氏(慶應義塾大学)が退任し、新たに川島浩一郎氏(福岡大学)と三藤博氏(大阪大学)が新任委員となります。以下にそれぞれの退任の弁と、新任挨拶を書いていただきました。

~~~~~

今年度で編集委員会を退かせていただきました。慶応では事務局が3年目となり、本年度から福岡大学および西南学院大学が交代してくれることになりましたので、丁度良い機会だと思ったわけです。今まで多方面にご迷惑をおかけすることが多かったと思いますが、それについてはお許しいただきたく、お願いいたします。

事務局の方は、喜田浩平さんがほとんどのルーティンワークをこなしてくださったので、私は春の文学

会での語学会の出店で色々な作業を眺めているぐらいのことしかしていません。前島和也さんはその間、編集委員会で運営委員を勤められたりしてお忙しく、また本年度は編集責任という重任を果たされることが決まっています。

既にこのニューズレターでも説明があったとおり、『フランス語学研究』の編集委員会は編集委員の固定化を避けるために、委員はある程度の期間を勤めた後に交代する仕組みになっています。私もこの規則に則って退かせていただくわけで、ちなみにこれで2度目となるわけですが、幸いなことにこの数年、若い研究者の方々が編集委員会の席に連なることを引き受けてくださっています。

私が初めて語学会に出席したのは1983年ごろで、夏休みに日本に戻ったときに松原秀一先生が、当時も今と同じ東大駒場で開かれていたフランス語研究会の例会につれていってくださいました。朝倉先生、三宅先生、田島先生、木下先生などにお目にかかったのは例会でか、または例会の後渋谷で設けられた交歓の場でだったと思います。その木下先生には去年12月に喜寿を記念した論文集が贈呈されたのは皆様もご存知のことと思います。

フランス語学研究会は木下先生のご尽力で日本フランス語フランス文学会から独立し、その後日本フランス語学会と名前を変えて発展の一途を辿ったことは非常に喜ばしいことだと思います。初めは関東の会員が中心だった語学会の運営も、東北、関西、九州などのメンバーが積極的に参加して下さるようになり、例会も秋には京都(年によっては文学会開催地)で開かれるようになり、大学院の会員の方々も東北や関西からいらっしゃって下さることがあります。これもすべて学会員の皆様と歴代の編集委員の方々のご協力によるもので、今後もこの方向での会の益々の興隆をお祈りする次第です。

私は始めて語学会例会に参加して以来、語学会が各会員の出身校に拘ることなく、あくまで語学会の枠組みで受け入れるという性格に非常に心を打たれています。出身校だけでなく、年齢・出身地や留学時期が同じだとか、同じ先生についたとか、同じ研究方法を選んだなどということは、しばしば強い同族意識を生むものですが、私の知る語学会にはまさにそのような意識を排除して、あくまで知識・研究の発展のためにいかなる人をも受け入れて議論の場を提供するという明確な態度があったと思います。

私個人としてはこれからも語学会の一会員としてフランス語学とフランス語学会の発展に微力を尽くしたいと思いますが、会員の皆様には是非とも語学会のこの偏りのない精神を大切にいただきたく、お願い申し上げたいと思います。（川口順二）

~~~~~

言葉について考えるのが好きでした。フランス語を専攻したのはフランス語学科出身だからで、いわば偶然でした。大学院では、渡瀬嘉朗先生、富盛伸夫先生、小野正敦先生、敦賀陽一郎先生、川口裕司先生の授業に出席していました。授業で習ったソシュールやマルティネ、ハリスの考え方に強い刺激をうけ、言葉の勉強を続けたいと明確に意識するようになりました。

いわゆる学派や理論によって言語研究に仕切りを設けることは、あまり好みではありません。ですが、自己紹介としてあえて規定すれば、おそらくわたしは機能主義者だと言って間違いではないと思います。マルティネやプラグ学派の理念や問題意識が肌にあっていたらしく、決定的な影響をうけています。

例会に定期的に出席したり、慶應義塾大学を会場とする「フランス言語学と一緒に勉強する会」に加えていただいたのは、修士の二年目あたりからでした。これらの研究会でいちばん印象的なのは、発表の長所や優れた部分がいつも尊重されていることです。これは欠陥・欠如の単なる指摘よりも、ずっと難しいことです。わたしも出来るかぎり皆さんをみならって、批判するよりも共感する人でありたいと思います。

あらためて考えてみますと、論文や研究書の読書経験よりも、実際に出会った方々から影響を受けながら勉強をしてきた気がします。たとえ学問上のことでも、影響というのは案外そういうものなのかもしれません。編集委員という新しい経験においてもまた、わたしにとって幸運な出会いがあることを願っています。（川島浩一郎）

~~~~~

このたび再び編集委員を務めさせて頂くこととなりました。何とぞよろしくお願い申し上げます。

ここ数年、かつて学生時代を過ごした京都大学文学研究科から言語学の非常勤講師に呼んで頂いているのですが、偶然にも昔院生の時に恩師大橋保夫先生が授業をなさっていたのと同じ教室に配当され、当時とほとんど変わっていない教室の雰囲気をととても懐かしく思うと同時に、時の流れのはやさを痛感し、また、教壇に立たせて頂いておりながら席に座って聴講していた院生の頃から自分がどれほど成長できたのかと振り返ると、恥ずかしいばかりでした。今回編集委員に任じられましたのを一つの機会とし

て、研鑽に励まなければならないと気持ちを新たにいたしております。

生成文法や形式意味論など、どちらかということ言語の形式的側面と言語学の理論それ自体にずっと関心を持ってきたのですが、これは元々言語哲学への関心から出発して一般言語学、フランス語学の方に進んできたという事情にもよっています。以前、テンス・アスペクト論、冠詞（指示詞、限定詞）論、代名動詞論を古代ギリシア哲学の三大難問になぞらえて「フランス語学の三大難問」と命名（笑）したことがあるのですが、この「三大難問」への関心をずっと抱き続けています。最近、母語としての直観が働く日本語の体系との対照研究にもいっそう注意を向けていきたいものと考えています。

（三藤 博）

#### 4. 前年度の編集責任より

この文を書いているのは4月中旬、2校の校正作業の最中ですが、このニューズレターをお読みの会員の皆さんのお手元には既に『フランス語学研究』40号が届いていることと思います。執筆者の方々、編集委員、ご協力いただきましたすべての皆様方にお礼申し上げます。

日本フランス語学会は会員の皆様のご協力を得て、会の運営も安定しております。また、昨年度からの印刷費の大幅削減に伴い、学会資金に多少の余裕もできました。そこで今回よりフランス語研究の促進を目的として「フランス語研究促進プログラム」を立ち上げ、会員の皆様から研究企画を募集することになりました。学会誌及びホームページにも案内は載せてありますので、詳しくはそちらをご覧ください。こちらでも以下に簡単に要領をまとめておきます。まず、応募者は特定のテーマにもとづいた研究グループを作り、その代表として研究企画書をフランス語学会に提出することができます。テーマはフランス語学に関連するものとします。企画書はA4判で2枚程度で、題目、代表者と企画参加者の氏名と連絡先、企画の具体的な内容説明を書いてください。応募者は企画書をメール（添付ファイル）で事務局に提出し、企画の採否について編集委員会の審議を受けることとなります。そして、編集委員会が企画を採択した場合、その企画を学会ホームページで公表し、さらに参加希望者を募った上、企画の最終メンバーが確定されます。成果の本誌への掲載は採択から2年後を目処とし、また分量、形態については、企画代表と編集委員会の合意にもとづいて決定されますが、企画の規模によっては、別冊による出版も考慮されることになっていきます。企画書の締め切りは10月末日です。斬新な企

画を期待するとともに、みなさまから本誌のさらなる充実に向けてこれからもお力添えをお願い致します。

なお、本年度は、私から前島和也氏に編集責任を引き継ぎ、また、新編集委員として川島浩一郎氏、三藤博氏のお二人が就任されました。昨年度まで編集委員として長きにわたりご尽力いただきました川口順二氏には厚くお礼申し上げます。(木内良行)

#### 5. 本年度の編集責任より

はしなくも『フランス語学研究』第41号の編集責任をつとめることになりました。まずは学会員の皆様には今年度もこれまでと変わらないご協力・ご支援をお願い致します。

さて本学会はお蔭様で毎年、新会員を迎えております。そこでこの場をお借りし『フランス語学研究』への投稿について改めて二三お願いしておきます。まず投稿そのものについてですが、もちろん会員であればどなたでも投稿して戴くことができます(論文、論評、紹介、語法ノートなどのジャンルがあります)。とはいえ、これまでも本ニュース・レターでお知らせして参りましたとおり、原則として投稿の前に先ず例会で発表して戴くことをお勧めします。口頭発表とこれに続く質疑応答により原稿の質が上がり、ひいては本誌全体の学的水準が維持・向上することにも繋がります。

次に表紙裏(いわゆる「表2」)の投稿規定と巻末の執筆要綱は必ずご覧になって下さい。いずれも必要に応じて変更されることがありますので、年来の会員の方にも、また最近会員になられた方にも是非ご確認をお願い致します。本誌の編集委員は現在20余名ですが、例年数多く寄せられる投稿原稿の査読から製本直前の割付に至るまでの長期にわたり神経を使う作業を考えると、決して多すぎる数ではありません。枚数制限をはじめ、細かな書式を守って戴ければそれだけ編集委員の負担が軽減され、学会誌の質を高める作業に専心することができます。

最後に39号の編集後記にも記されておりますように、本学会の財政が今後改善される見通しがあります。編集委員一同、『フランス語学研究』紙面の充実を計るべく検討を重ねておりますが、学会員の皆様には編集委員などを通じて有意義な御提言をお寄せ下さりますよう、改めてお願い申し上げます。

(前島和也)

#### 6. 運営・企画担当より

2005年度は、通常の例会に加えてイベントが盛り沢山でした。4月11日にCh. Marchello-Nizia氏(ENSLSH-Lyon)講演会(京都大学と共催、於京都大

学)、4月16日に同氏講演会(於慶應三田)、5月28日にシンポジウム「与格とは何か」(於立教大学)、11月26日にD. Leeman氏(パリ第10大学)講演会(於青山学院大学)、J. Deulofeu氏、Cl. Blanche-Benveniste氏(共にプロヴァンス大学)を迎えてのシンポジウム「フランス語の話し言葉をめぐって」(於東大駒場)、12月15日にB. Cerquiglini氏(ルイジアナ州立大学)講演会(上智大学と共催、於上智大学)、12月17日にシンポジウム「時・相・法: フランス語・ドイツ語・スペイン語の対照的観点から」(於東大駒場)をそれぞれ開催いたしました。会場を提供して下さった方々、来日研究者のお世話をいただいた方々、司会者や参加者の皆様にお礼申し上げます。また例会発表の内容も、フランス語や日本語との対照的考察、古仏語、メターファー研究などヴァリエーション豊かでした。

今年度も、フランス文学会が開催される慶應三田で、5月20日の午前に文学テキストのコーパス分析に関するシンポジウムを企画中です。英文学、フランス文学、日本語などの隣接分野の研究者をパネリストにお招きする予定です。このニュースレターをお手にされた時点で、詳しい案内ができていますことと思いますが、多数の皆様のご参加をよろしくお願いいたします。

また学会では会員の共同研究を支援する趣旨で、今年度より企画募集をはじめます。詳細は学会誌最新号(第40号)巻末の規定をご覧ください。皆様の応募を歓迎します。

個人的には、二度目の運営委員を何とか大過なく務めあげることができて今ほっとしています。不器用で頭の切り替えがうまくできなくて、勤務先での仕事の最中でも常に学会のことが頭の隅から離れないような日々でしたが、それでも30代で担当したときよりはずっと楽に進めることができたのは、善かれ悪しかれ自分がそれだけ年をとってしまった、ということかもしれません。

新運営委員は、関東側(正)の山田博志氏(筑波大学)を中心に、(副)阿部、関西側(正)井元秀剛氏(大阪大学)、(副)大久保朝憲氏(関西大学)のご担当となります。引き続き皆様のご協力をよろしくお願いいたします。(阿部 宏)

#### 7. 今後の例会予定

6月24日(土)

東京大学(駒場)10号館3階会議室 15:00-18:00

小田涼(関西大学非常勤)

「la fille de Monsieur Dupont - デュポン氏の娘」において唯一性が含意される条件」

春木仁孝(大阪大学)

「Ce fut ma première rencontre avec le passé simple.

- スキャニング操作と単純過去」

7月15日(土)

東京大学(駒場)10号館3階会議室 15:00-18:00

松原万容(京都大学大学院) 題未定

1名未定

9月30日(土)

東京大学(駒場)10号館3階会議室 15:00-18:00

出口優木(京都大学大学院) 題未定

井口容子(広島大学) 題未定

10月15日(日)

京大会館

安達博明(関西学院大学) 題未定

平塚 徹(京都産業大学) 題未定

11月25日(土)

東京大学(駒場)10号館3階会議室 15:00-18:00

2名未定

12月16日(土)

東京大学(駒場)10号館3階会議室 15:00-18:00

シンポジウム(予定)

## 8. 研究会のお知らせ

フランス言語学を一緒に勉強する会

慶應義塾大学三田キャンパス(通常は大学院棟)

で月一回、土曜の15時から18時まで研究会を開いています。この研究会での発表は一人3時間で、始めてここで発表しようとする方はこの時間の長さを聞くと「そんなに長く話せるか?」と不安を感じるようです。しかし発表の前に何回か参加するうちに時間が長いからこそ気楽に話すことができ、面白い発見があるということが分かってくるようです。短い発表時間では発表者は「完成品」を手際よく提示することに心を砕き、聴衆は提示された「完成品」の品定めをするというような関係になりがちですが、この勉強会でのゆったりした時間の流れの中では、発表者は完成品ができあがる前の段階を参加者と共に歩むということが可能になるからです。発表者が話している途中であっても、参加者はその場で遮って質問したり、最後に参加者全員に意見を言ってもらおうという全員参加型のスタイルは、自由で刺激に満ちたものであり、勉強会の大きな魅力となっています。皆さんもこの勉強会に参加して、研究のプロセスを共に辿っていく楽しみを是非味わっていただきたいと思います。

勉強会での発表を希望する方は世話人、川口順二 <jnkawaアットattglobal.net>、前島和也 <kazuyaxアットecon.keio.ac.jp>、大久保伸子 <okuboアットmx.ibaraki.ac.jp> まで御連絡下さい。論文や著書の紹介・論評なども歓迎いたします。

案内はメールリストFrenchlingでのみ行い、郵送による通知は行っておりません。Frenchlingに加入しておられない方は世話人のアドレスにお知らせいただければ、個人宛にメールでご案内します。今年度前期の予定は次の通りです。

4月22日 中田俊介(東京外国語大学大学院)

「フランス語のリズムと情報構造」

5月6日 喜田浩平(慶応大学)

「意味論と語用論の境界」

6月10日 赤羽研三(上智大学)

「描写と語り」

7月8日 館脇晋一郎(茨城高専非常勤)

「アラン・ロブ＝グリエの小説作品」

9月16日 発表者未定

10月14日 発表者未定

11月11日 発表者未定

12月9日 発表者未定 (大久保伸子)

~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~

関西フランス語研究会

関西大学を会場に、関西の大学院生と教員が中心になって研究会を開いています。原則として月1回、その月の後半の土曜日の午後3時から6時までなのですが、昨年度は、諸事情から以下の発表のみとなりました。

4月

清水光晴

「日本語の時間の意味を表す『なる』と対応するフランス語表現」

中南和香

「depuis の働き 『から』との対照」

6月

金田純平

「題目の日仏対照 特に左方転移と無助詞題目に注目して」

9月

大久保朝憲

「述語否定による緩叙法的発話について」

12月

川勝恵理

「自動詞描写構文の文末形容詞 形容詞のアスペクト・二次述語性」

安西記世子

「複合過去の『事態確認』機能に関する一考察」

この研究会の趣旨は、論文や学会発表をひかえる人がその準備のために、あるいはまた、関東で発表を終えた人が関西でそれを聞けなかった人のリクエストにこたえてというように、形式にこだわらず、

気軽に意見・情報の交換ができる集まりです。また、最近の研究発表が中心ですが、新刊書や論文の紹介、国内外の新しい研究の動向についての紹介や解説なども歓迎していますので、発表を希望される方は世話人の平塚が久保までご連絡ください。また案内はメーリングリストFrenchlingのみで行っていますので、加入されていない方は世話人までアドレスをお知らせいただければ、個別にメールでご案内いたします。

平塚徹：hiratukaアットcc.kyoto-su.ac.jp

久保朝憲：tomonoriアットipcku.kansai-u.ac.jp

## 9. 研究・近況報告

3人の方にフランスでの言語学の現状なども交えて近況報告を書いていただきました。

~~~~~

2004年の9月にパリに来て早一年半以上が経とうとしています。去年の9月にDEAを終え、現在はパリ第7大学の博士課程に登録してフランス語の相互表現に関する博士論文に取り組んでいます。パリ7の言語学科の建物は色々な場所に分散していますが、私が毎日通っているのは本部のJussieuからは少し離れた13区の中華街近くにある建物です。ここには統語論のAnne Abeillé、Danièle Godard、形態論のBernard Fradin、中国語学のMarie-Claude Paris、発話理論のDenis Paillard、Jean-Jacques Franckelなどの先生たちの研究室、授業用の教室などがあり、廊下などではよく先生たちとすれ違います。私は指導教授のPaillardの授業があるとき以外は博士課程の学生用の部屋で勉強することにしていますが、この部屋にはコンピューターが何台もあり、Frantextなども利用できて便利です。またこの建物にはパリ7の言語学科（一階）以外にもいくつかの一般企業のオフィスが入っていて、地下には社員食堂（？）のようなものがあり、毎日昼になると同じ博士課程の中国人、韓国人、ルーマニア人、モロッコ人などの友人と食事をしに行っています。先生たちもここで食事をし、先日は指導教授と一緒に食べる機会もありました。一緒に食事をしながら色々な話が出ますが、やはり今はCPE問題が気になります。

この文章を書いている現在（2006年3月末）フランスはCPE問題（Contrat Première Embauche）で大混乱しています。これはVillepin内閣によって提出された、26歳以下の若者の雇用促進を図った雇用契約ですが、2年間の新規雇用の期間に会社側が理由を示さず社員を解雇できるという内容に反発した労組や、自分たちの将来を不安視した大学生、さらに

は高校生が連日街頭でデモを行い、先日はフランス全土で300万人（主催者側発表）を動員するデモとゼネストがあったばかりです。さらには学生が大学を占拠するといった事態まで発生し、パリの多くの大学で授業は3週間ほど前から中止され、特に建物が被害を受けたソルボンヌ大学などでは大学の前がバリケード封鎖され、いつ再開の目処が立つのかもわからない状態です。3月中旬、EHSSの Irène Tamba 先生のセミナーに招かれてパリにいらしていた泉邦寿先生の講演も、学生集会のために建物に入れず危うく中止になるところでしたが、別の会場が見つかり難を逃れました。また先日たまたまソルボンヌの前を通りかかると、学生と機動隊の小競り合いに遭遇し、警察が撒いた催涙ガスを浴びて気分が悪くなるという経験をしました。デモに参加している学生たちはこの運動を「68年5月」になぞらえて、政府が法案を撤回するまで運動を続けると意気込んでいます。私が通っているパリ7の言語学科の建物ではさして混乱はみられませんが、ただ反対運動に賛同して授業を中止する先生は何人かいました。今後この問題がどのように展開していくか目が離せません。

また数ヶ月前にはデンマークの新聞がマホメットの風刺画を掲載して大問題になりましたが、パリでもイスラム教徒を中心とした反対デモが行われ、様々なメディアで議論が行われました。週刊誌 *Le Nouvel Observateur* の論説のように、この問題を「表現の自由」と「イスラム教徒に対する尊敬」のどちらを優先するかという問題に帰着させ、後者を認めつつも前者の不可侵性を強調する論調が見られますが、モロッコ人、パキスタン人などのイスラム教徒の友人に言わせれば、これらの度が過ぎた風刺画に対してはたして本当に「表現の自由」などという議論ができるのかということになります。この他にも去年はヨーロッパ憲法の国民投票、郊外での暴動など様々な問題があり毎回盛んに議論が行われるため否が応でもこれらの問題に関心を持たざるを得なくなります。

上記の政治・社会問題も興味があるところですが、様々な国の人々が集まるパリにあってはやはり言語の多様性にも興味を惹かれます。現在私は国際大学都市のイタリア館というところに住んでいますが、ここにはイタリア人のほかにスペイン、ポルトガル、ギリシャ、ドイツ、スイス、ブルガリア、アルメニア、トルコ、パキスタン、レバノン、ブラジル、メキシコなどから来ている学生・研究者が住んでい

ます。住人の半数を占めるイタリア人は北から南までイタリア全土から来ていて、彼らの話すイタリア語のアクセントの多様性に驚かされます。またイタリア人、スペイン人などがフランス語をあまり勉強せずにフランスに来て、数ヶ月も経てばすぐにフランス語ができるようになるということは、彼らの言葉がロマンス語という同じ言語グループに属しているということから当たり前だと思っていましたが、それに対してアルメニア人やブルガリア人がロシア語を話すこと、トルコ人がアゼルバイジャン語、ウズベク語、キルギス語などを理解すること、などということは、歴史的背景、言語系統に関する知識があれば当然の事実かもしれませんが、私がこちらに来るまでは気づかなかったことです。

外国人と友達になる機会は多いのですが、それに比べるとフランス人（特にパリの）と知り合う機会はあまり多くないような気がします。おそらく私の偏見に過ぎないでしょう。（芦野文武）

~~~~~

最近はややラテン語の方に軸足を移している。そのため、今回はラテン語研究から見たフランス語についてお話させて頂こうと思う。

言うまでもなくロマンス語を生み出したのは口語ラテン語である。従ってラテン語からフランス語に至る変遷を考察しようとするれば、このラテン語の oralité を無視することはできないはずである。

少し古い話だが、1994年にはParis IVの Centre Alfred Ernout で Les structures de l'oralité と題されたコロックが開かれている。もはや現用語ではないというその性格上、口語としての姿を伝える資料が極めて乏しいラテン語である。しかしながら、こうした口語という側面からの研究の重要性は次第に認知されつつあると言える。

なかでも Michel Banniard 氏（EPHE-IV）は、*Viva voce : communication écrite et communication orale du IVe au IXe siècle en occident latin* (1992) 以来、一貫してこのラテン語の oralité に着目しつつ、フランス語を生ぜしめた過程を浮き彫りにしようと努めている。例えば、前置詞 ad と動名詞によって「目的」を表すのが規範的ラテン語であるが、不定法のみで目的を意味することがある。この事象を、従来のように単に「誤用」で片づけてしまうのではなく、すでに当時のラテン語では、不定法を用いたこの表現が、コミュニケーション上の問題を起こすことのない、表現としての potentialité を有していたと考えるのである（«Diasystème latinophone et interactions

communicationnelles (IIIe-VIIIe s.)» in *Mémoires de la société de linguistique de Paris*, XI, 2001)。他にも、時代が下るにつれ高まる前置詞の使用頻度を、expressivité との関わりから論じるなど、興味深い指摘も行っている。

また、*Information grammaticale* (2005) に掲載された氏の最新論文 «Prototypes latins de la migration à gauche des morphèmes suffixés» では、ラテン語の「語幹 + 語尾」という構成と、フランス語の「冠詞 + 名詞」との比較を行っている。それぞれを *lexème + suffixe / préfixe + lexème* という図式に置き換えながら、その変遷を論じている。さらに、フランス語において義務的な主語人称代名詞も、こうした *lexème + suffixe* (ラテン語 *ama-t*) から *préfixe + lexème* (フランス語 *il aime*) へ、という展望のもとに捉えられるとしている。これはまさに文法化 もっとも Banniard 本人はこの用語を用いていないが という見地からのアプローチと重なるし、言語類型論的な視点も伺える。

最後に、今年の Centre Alfred Ernout では6月5日、6日、7日に la quantification en latin というテーマのコロックが開催される予定である。詳細は <http://www.alfred-ernout.paris-sorbonne.fr/> にて確認されたい。（小倉博行）

~~~~~

私の卒業論文は Valéry である。3年次に教職のため、たまたま登録した必修科目の英語学専門は廣岡教授の方言分析の講座。最後の分析レポートに先生のコメント「ようやった。あんた、こんなんむいてるひとや」。先生の真意はもう聞くすべも無いが、これにより私の思い込みが始まったといっても過言ではない。仏文科の小方教授の言語学の授業で、中世に華々しく現れ、その後宗教・政治に翻弄され、今や村の片隅に消え行く俚言として追いやられてしまっているオック語の存在を知り、これ以外には無いと信じた。女子高で教鞭をとりつつ、夏休みを利用して方言調査の対象地を探すことにした。

コレーズ県側の limousin 方言とロット県側の languedocien 方言の言語境界線上に決めて、その地の un des plus beaux villages de France というガイドブックと地図を手にして真っ先に目に入ったのが、Colette (Gabrielle, 1873-1954) が滞在した村という記述。確かに Ronjat の本に付随する地図にその村の名(当時は町)が出ていた。中世の佇まいを残すもの。まだ観光地らしくないほんの小さなその村の小さな市に村人による二冊の本！ - つは詳しい村の歴史

記述とガイドブックを兼ね現状を記したもの (J.Lalé, Président des Amis de Curemonte)、もう一つはオック語方言のフランス語表記を含むここ 100 年程の村の日常生活を綴ったもの (M-Th. Giscard)。当時は大学の紹介状も無く、日本人が方言調査にきたとして、情熱だけでどうしようもない。村人にとっては失礼極まりない話である。まず本の著者の Lalé 氏に、そしてそこから村長 Tronche 氏に事情の説明をしたが、「俚言」も農夫の間に聞かれるのみだというが、当然積極的な回答を望むこともできない。Giscard 夫人にも出会えたが、村人がよそ者に「教養の無い話し言葉」というレッテルを貼られてしまったオック語を気安く話してはくれない。ついに、「着倒れ」京都のお寺の一人娘が方言学とは民俗学なのだと身をもって知る。市用の玉ねぎやにんにくの皮むきからきれいな三つ編み仕上げも、モルタルを石鎚でたたいて剥がし中世時代の石組みに戻す仕事も、八エの大群を無視する気構えも、繊細な牛の送り迎えも、家畜の解体も、そして唯一はじめから仲良しだった [pat'u] というのみだらけの老犬の交通事故での骨折に村人たちのだした決断（猟銃での安楽死）と埋葬の出来事等々、とうとうお酒の頂けない私とその村では一軒毎に風味が微妙に異なる家庭ワイン、Vin paillé の味を区別できるまでになる。

10 年にも亘る夏休みの村訪問の間には、日本の大学の先生方にまざまな面でお世話になった。特に白井教授と小方教授のお陰で、高塚教授に博士課程を受け入れていただき、一対一で中世オック語を教授していただくも、奨学金でパリ大学に派遣していただくとの報告が最後となった。パリでは、M.R.Simoni 先生のアトラスの方言研究のセミナーに参加した結果、J.Chaurand 教授と食事をする機会を得たし、M.Muron 先生や X.Ravier 教授には公私共にお世話になることにもなる。また、LE。0.でのオック語勉強会にも参加した。10ヶ月の滞在はD.E.A.の取得で終わったが、日本帰国後も村とフランスの先生方との連絡は欠かさなかった。セミナーの代表が Simoni 先生から J.-Ph. Dalbera ニース大教授に代わられたのを機に博士論文を完成させる機会と申していただき、日本で大学の職を辞し、その後の2年間没頭した。村人たちは、生きたオック語の最後の継承者として私のオック語の個人教授に徹してくれた。口頭試問当日は、Dalbera 担当教授、Ravier ツールーズ大学名誉教授、Contini グルノーブル大学名誉教授、Gasiglia ニース大学教授に審査を受けた。パリから Simoni 先生ご夫妻も来て下さった。高塚先

生から頂いた数キロになるご自身でコピー・製本された *Las lays d'Amors* と先生のお授業のノートが今私の机の上にある。後に知ったのだが、闘病中も痛みを緩和する薬を取ると教えられなくなると、取らずに最後まで教えて下さったのが *Flamenca* である。そして今私はルイジアナ州立大学の大学院生にその *Flamenca* を教えることとなる。（前川眞明子）

10. ルイジアナ便り

うれしい報せがある。アメリカ合衆国が多言語併用についてやっと意識するようになったことだ。これには人口統計レベルで、ヒスパニック系言語圏の人口の大きい比重ということだけではなく、商業レベルでの理由も介入している。というのも、メキシコとカナダとの経済協定締結以来、大部分の商品の商標ラベルや使用説明書がスペイン語とフランス語でも表示されることになったのだ。いまや中国製品のオンパレードといえるアメリカのスーパーマーケットは、時にはあやしい訳もあるとは言え、何と云っても私たちを惹きつけて止まない、超スーパー3カ国語辞典の相を呈するに至っている。全てがフランス語に訳されていて、その結果フランス語は北アメリカ大陸のいたるところで読まれことになる。

ルイジアナが建国して間もないアメリカに譲渡（ナポレオンの最大の失策だ！）されて200年経ってからニューオーリンズの文化遺産がこうむった2005年の大災害は、フランス語がこの国の歴史の一部であることを再び記憶に呼びおこしてくれた。そして今日でもフランス語がこの地に根付いていることを示してくれたのだ。Lafayette から Prairieville、そして Thibodaux から Pointe Coupée にいたる地域では今もなお多くの高齢者の母語はフランス語である。教育においてはフランスの学校でのバスク語やブルトン語のように、ルイジアナ州でフランス語が顧みられない時期があったことは否めない。しかし現在、フランス語との深いつながりを重要視するルイジアナ州の政治階層と、何百名ものフランス語教師の派遣を実現したフランス語圏の国際協力活動との共同作業によって、理想的な環境が出現し、毎年30万人の生徒たちがフランス語を学んでいる。この州ではフランス語が第二外国語としての輝かしい将来を保障されている。

文化的そして政治的な見地から見てもこの動きは援助されなければならない。ルイジアナ州は、フランスとも、そしてカナダ ここからイギリス人に追われた人々がルイジアナにたどり着いたのだとも歴史的に深くかかわっている。また、セネガル ここから多くの黒人奴隷がルイジアナにつれてこ

られたのだ。とも多くの苦しみと同時に、豊かな文化によって結ばれている（伝説、料理、音楽を見よ。なお「ジャズ」の語源はおそらくセネガルの wolof 語である）。その意味で、ルイジアナ州はアメリカ合衆国からのフランス語圏へ通じる扉であると同時に、アメリカ合衆国における文化の多様性をテストする実験室にもなりうるのだ。

フランスでフランス語に身を捧げ、大学ではフランス語を教える使命を担い、また政府にあっては言語政策に従事してきた者として、フランス語に携わるのを一瞬たりとも止めることのなかった私が、このパトナルーージュのルイジアナ州立大学に赴任する決意をした理由は、以上述べたような事情による。フランス語圏の中でも魅力に溢れるこの地域で研究を進め、そしてできれば、我々の友人である cajun の人々と共にこの地でのフランス語の発展に貢献したいと願っている。《 Bon temps rouler! 》

(Bernard Cerquiglini 前川眞明子訳)

11. Webサイト紹介：ビデオで見る言語学
インターネットで手軽に聞けるようになったフランスのラジオ局では娯楽・芸術から時事や教養まで幅広いジャンルを提供する France Culture に愛着をもつ人が周囲には多いようです。ところでweb上で聞ける講演は実際の講義やセミナーに代わることは決してできませんが、様々なテーマにかんする講演がほぼリアル・タイムで聞けることはフランス語学に携わる者にとっても益するところは少なくありません。そこで目をとめる価値があると思われるサイトをいくつかご紹介します。

先ず **Diffusion des savoirs de l'Ecole normale supérieure** (<http://www.diffusion.ens.fr/>) では社会科学・自然科学をはじめ多岐のテーマにわたる数百のセミナーや講演が聞けます（講演によっては画像を見ることがもできます）。残念ながら使用言語はフランス語とは限りませんが、テーマの多様性と平均水準の高さから一度立ち寄って見る価値はあるでしょう。言語学者はページ・トップ右の thèmes から linguistique を選んで下さい。Kleiber や Victorri などが見られます。

次に **Université de tous les savoirs** (<http://www.canal-u.education.fr/canalu/chainev2/utls/>) ですが、LISTE DES THÈMES から Langues-linguistique を選ぶと、ビデオで配信されている12件（2006年4月現在）の講演を見ることができます。言語学関連ではC.-B. Benveniste, B. Cerquiglini, O. Ducrot など、日本でもよく知られた言語学者の講演があります（残

念ながらいずれも2000年の録画で画質は万全ではありません）。

なお、言語学との関連はありませんが、昨年末、世界の注目を集めた郊外問題に関するEcole des Hautes Etudes en Science Sociale で行われた一連のシンポジウムの映像が現在<http://www.ehess.fr/enseignements/cercles-banlieues/index.html> で見られることを加えておきます。（前島和也・喜田浩平）

編集後記

ここ数年藤田知子さんがこのニューズレターを担当してくださっていましたが、今年のご都合が悪いために急遽、私たちが代役を勤めさせていただくことになりました。

本号では2005年12月にフランス語学会が上智大学との共催で開いた Bernard Cerquiglini 氏から、ルイジアナの事情などを盛り込んだ紹介を頂きました。12月の特別例会は語学会員と学生の方々が数多く集まり、フランスの言語政策を自ら進めていらっしゃるCerquiglini 氏ご本人から興味深いお話をうかがうことができましたが、ここでは氏のルイジアナでの意気込みが語られています。

ニューズレターはフランス語に関わるすべての人に開かれた場なので、できるだけ多くの人の発言を得たい、そう思っていたところ、嬉しいことに3人の方々が応じてくださいました。南仏語で博士論文を終えて現在ルイジアナ州立大学でロマンス語学を教えている前川眞明子さんは博士論文作成の思い出を綴ってくださいしています。ラテン語学にも造詣の深い小倉博さんはラテン語から見たフランス語研究についての最近の情報をまとめてくださいました。最後に現在博士論文と取り組んでいる芦野文武さんがパリでの日常生活を語っています。これらの報告はさまざまな読者にとって色々な意味で興味深いものだろうと思います。

藤田さんがウェブ上でのフランス語研究に役立ちそうな情報を集め始めてくださったことはこのニューズレターの読者の方々が良くご存知のことでしょう。私たちもこの路線を踏襲し、今回は前島さんと喜田さんから興味深い情報を頂きました。是非お役にたてていただきたいと思います。

(大久保伸子、川口順二)